

語り手 片桐利喜さん  
 (明治30年生まれ)  
 昭和58年7月17日収録

あらすじ  
 昔、じいさんとばあさんがおられた。隣のじいさんやばあさんは、たいそう怠け者だった。あるとき、じいさんは「草刈りに行くかい」と鎌を研いでおられたけれど、井戸の縁でポチャーンと音がしたものだから、ばあさんが「じいさんは井戸に落ちましたすこだ」と井戸をのぞいて見られたら、やっぱりじいさんが井戸に落ちていたって。

じいさんが「ばあや、おら、井戸に落ちたけん、縄取ってごしえ」と言っ

### 身代の上がる話

(西伯郡大山町高橋)



イラスト・福本隆男

## 新話型の珍しい話

わいのう」と言いながら、喜んでおられたっ上がって。ばあさんて。そうしたところ、隣も一生懸命にじいさんをのじいさんやばあさん引っ張りあげる。「身代が、それを真似しようとながったわいのう」とした。「隣のじいさんが言われたら、なんと体中がんにょうなだけん、朝間とうから草刈り行って、井戸に落ちて、銭ががいにいって上がった隣まわりの子どもたちが、このじいさんは

横着なだけん、寝てばかりござーだけん」とばあさんが怒られるものだから、じいさんも真似をして「おらも草刈り行かかい」と草刈り鎌を研いで行ったら、井戸へ落ちられたって。

この話が典型的な日本昔話に属しているとお気づきになれるはずである。それは有名な「花咲か爺」とか「猿地蔵」「ネズミ浄土」などの話で、主人公であるおじいさんは確実に成功して幸せになるのに対して、隣のじいさんは、これまた必ず失敗して不幸な結末を迎えることに決まっています。

「はや、井戸に落ちたから縄取ってごしえ」とばあさんに言う。それから、縄を取ってもらい、じいさんは自分の首に結わえつけただって。

ばあさんが、「身代が上があわいのう。身代があわいのう」と言いながら引っぱりあげておられたけれども、「上がったわいのう」と言われるまでに息が切れてしまっただって。

それで、「人真似なんかはするものではないぞ」と聞かされています。つまり、新話型といえる。その昔こんぼち、こんぼの葉、煮えて嚙んだら苦かった。

（元鳥取短期大学教授）  
 （水曜日に掲載）

解説

鳥取県立博物館HP「鳥取の民話」コーナーで語り手の音声が聴けます。